

報告

山梨県小平沢古墳の測量調査報告

— LiDAR 技術を搭載した UAV 撮影・解析による測量成果から —

櫛原 功一^{*1}・佐藤 剛^{*2}・尾崎 昂嗣^{*2}・中山 誠二^{*1}・望月 秀和^{*1}

*1 帝京大学文化財研究所 *2 東京都市大学

- | | |
|-------------------|--------------------|
| I. 調査目的 | IV. 調査方法と実施 |
| II. 米倉山の遺跡と米倉山古墳群 | V. 小平沢古墳に関する考古学的成果 |
| III. 小平沢古墳の立地と概要 | おわりに |

I. 調査目的

帝京大学文化財研究所では、2022年度より、国内事業として甲府市教育委員会と共同で中道古墳群（山梨県甲府市中道町）の調査を開始した。中道古墳群とは甲府盆地南縁の曾根丘陵付近、旧中道町内に分布する古墳群を指し、その中に地理的に区分された東山古墳群、金沢古墳群、米倉山古墳群などの古墳群が存在する。小平沢古墳、天神山古墳、大丸山古墳、銚子塚古墳など、甲府盆地の古墳時代前期から中期にかけての首長系譜を示す大型墳を含み、古代甲斐国の形成過程を考える上で重要な古墳群であり、これまで前期古墳に先行する弥生後期の上の平方形周溝墓群や甲斐銚子塚古墳、大丸山古墳など、数多くの調査や研究が行なわれているが、時期や埋葬施設など未解明な古墳も多く、古墳群の年代観や変遷過程については必ずしも確定されたわけではない。とくに中道古墳群のなかでも最初の古墳で、甲府盆地に最初に出現した小平沢古墳については、従来、県内唯一の前方後方墳として形態や時期確定のための周辺調査や主体部の構造解明などが必要と考えられてきたが¹⁾、本年、LiDAR 技術を搭載した UAV 撮影および解析を実施したので、その調査概要と成果について報告する。

II. 米倉山の遺跡と米倉山古墳群

中道古墳群の一角をなす米倉山古墳群は旧中道町内の甲府市下向山地区の米倉山にある。米倉山は北側の滝戸川、南側の七覚川に開析された曾根丘陵の一支丘をなす標高380mの丘陵で、旧石器時代以降の遺跡が確認されている。とくに弥生～古墳時代前

期の集落遺跡、古墳時代前期の小平沢古墳、南側斜面の後期古墳群の存在が特筆される。

米倉山では、戦後間もなく行なわれた調査で出土した石器から旧石器の存在が明らかとなり、その後、上向山地区の立石遺跡では2～3万年前のナイフ形石器や台形石器が出土するなど、山梨県内では数少ない旧石器時代の遺跡が知られている。1947年（昭和22）、農道工事のさいに鏡などの遺物が発見され、小平沢古墳の存在が初めて確認された。1967年（昭和42）には都留文科大学考古学研究会による調査が行なわれ、縄文前期の諸磯式土器、弥生時代中期の条痕文土器などが発見されている。また1986年（昭和61）の遺跡分布調査では、米倉山一帯で旧石器時代から平安時代の9遺跡、10基の古墳が確認され、同年、南側の無名墳で6世紀代の須恵器が採集された。

1991年（平成3）から1994年（平成6）まで行なわれた米倉山ニュータウン造成工事では、米倉山B遺跡で弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡52軒、方形周溝墓2基などが調査され、自然谷から「貨泉」1枚が出土した。貨泉は中国、新（8年～23年）の銭貨で、後世の混入ではなく、弥生後期～古墳前期にもたらされた可能性が指摘されている。また古墳前期では8号住よりS字状口縁台付甕（S字甕）の初期資料が出土し、東海地方の影響が認められる。また方形周溝墓は16×15mの規模があり、底部穿孔をもつ有段口縁壺が出土した。また南側では狐塚古墳（1号墳）、無名墳（2号墳）、くちや塚古墳（3号墳）の3基の後期古墳が調査された。1号墳は6世紀後半で、横穴式石室の一部が検出され、鉄刀、素環鏡板付轡、管玉、切子玉、須恵器などが出土した。2号墳は直径約20mの円墳で、横穴式石室の一部が

検出された。鉄鏃、刀子、金環、須恵器などが出土し、7世紀代の築造と推定されている。3号墳は直径約6mの楕円形を呈し、横穴式石室は天井部を除き良好に遺存した。石室内より須恵器蓋坏が出土し、7世紀後半代の終末期古墳であることがわかった。

Ⅲ. 小平沢古墳の立地と概要

米倉山一帯に分布する米倉山古墳群のうち、米倉山北側の鞍部に立地する小平沢古墳は、北側を前方部とする南北方向の主軸をもつ前方後方墳で、全長45m、後方部は幅25m、高さ7.5m、前方部は幅18m、高さ4mを測る（坂本 1998）。構築時期は一般的に4世紀中葉以前とされてきたが、近年では弥生～古墳時代全般の年代観の見直しによって3世紀後半代の構築と推測され、山梨県最古級の古墳といわれる。1935年（昭和10）刊行の『史蹟名勝天然記念物調査報告』8では、仁科義男が中道町全体の古墳分布について報告した。その中で第三群（米倉山古墳群）には18基の古墳が存在し、第一号墳（小平沢古墳）は全長55m、後円部の高さ5.1mの前方後円墳で、未発掘のため副葬品等は不明と記されている（中道町 1975）。さらに小平沢古墳の西に連続するように第二号墳（前方後円墳）があり、主軸は東西向きで、主軸長46mと記載されているが、この古墳については後述する小平沢古墳の西側の「無名墳」に該当する。また第三号墳（「口開塚」、円墳、藤塚の西南約三町許り）のほか、米倉山上に東西縦列する6基の円墳の存在を記している。

1947年（昭和22）、農道開設工事の土取りのさい、小平沢古墳の後方部墳頂のやや中央よりで斜縁二神二獣鏡、勾玉、土師器小形埴が偶然発見された。発見経緯や詳細な出土状況は不明で（山本 1980）、1952年の調査のさいに山本寿々雄により鏡の存在が明らかになった（仁科・山本 1953）。

1952年（昭和27）、小林知生（山梨大学）、中川成夫、吉田章一郎、桜井清彦らにより小平沢古墳と金沢地区の「ふじ塚墳」（藤塚古墳）の調査が実施された。小平沢古墳では墳丘の実測および主体部確認のための5本の試掘調査が行なわれ、前方部拵れ付近の墳丘上部より土師器S字口縁甕形土器（S字甕）B種の破片が出土した。のちに山本寿々雄によって5点の胴部破片が報告され、故意に破碎された可能性が指摘されている（山本 1980）。その折に1947

年の出土遺物が明らかになり、見学に訪れた駒井和愛によって東京大学で鏡の成分分析が実施されている。

1975年（昭和50）の『中道町誌』には、小平沢古墳が丸山塚、瓢箪塚と呼ばれていたこと、全長52mの前方後円墳であることが記載されている。

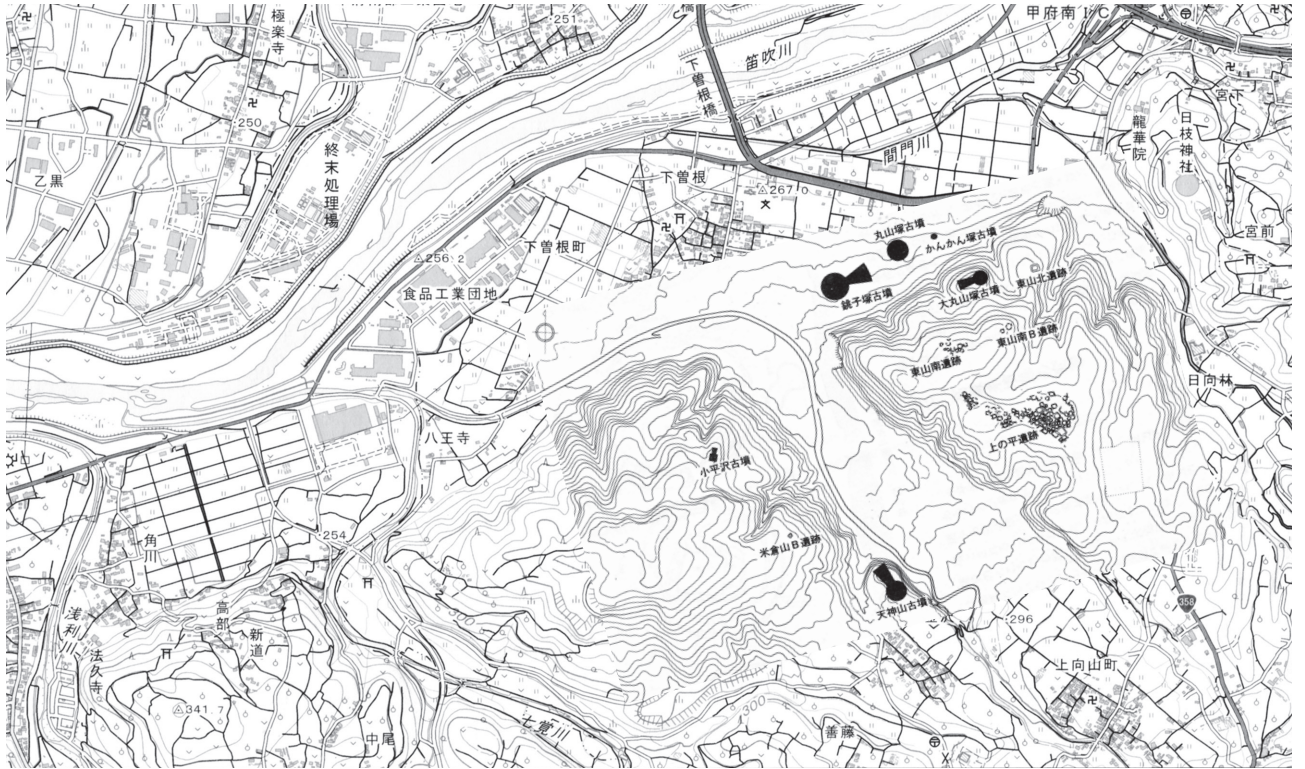
1978年（昭和53）には小林広和、里村晃一により平板による測量調査が行なわれ、全長45mの県内唯一の前方後方墳であることが初めて指摘された（小林・里村 1978）。また尾根上の斜面に立地し、自然の起伏を利用したものと推測され、甲府盆地への古墳文化の波及ルートと考えられる中道往還を眼下にした立地で、低地から仰ぎみる景観は大丸山古墳に先行する可能性があるとし、小平沢古墳から大丸山古墳、銚子塚古墳、天神山古墳へと続く曾根丘陵の前方後円（方）墳の変遷過程が提示された。1981年（昭和56）山梨史学会（代表 小林広和）による試掘調査が行なわれたが報告はなく、詳細は不明である。

その後1980年～1990年代には、弥生時代、古墳時代の研究者により小平沢古墳の被葬者に関する議論が行われた。宮澤公雄による諸議論の整理によれば（宮澤 1994）、畿内の影響を受けた東海西部の入植者のリーダーとする橋本博文の説（橋本 1984）、弥生後期からの墓域である上の正方形周溝墓を避けるように米倉山に立地することから征服者の墳墓とみる萩原三雄の説（萩原 1985）、在地首長層と東海系集団が政治的に結託したとする中山誠二の説（中山 1989）、東山地区での墳墓築造を認められなかった別集団の墓とする末木健の説（末木 1993）がある。また宮澤は、米倉山を中心とした地域に東山勢力と対峙する異なる在地勢力が築造した古墳とみている（宮澤 1994）。

2015年（平成27）、甲府市教育委員会によりトータルステーションを用いた20cmコンタの小平沢古墳の地形測量図が公表された（甲府市 2015）。

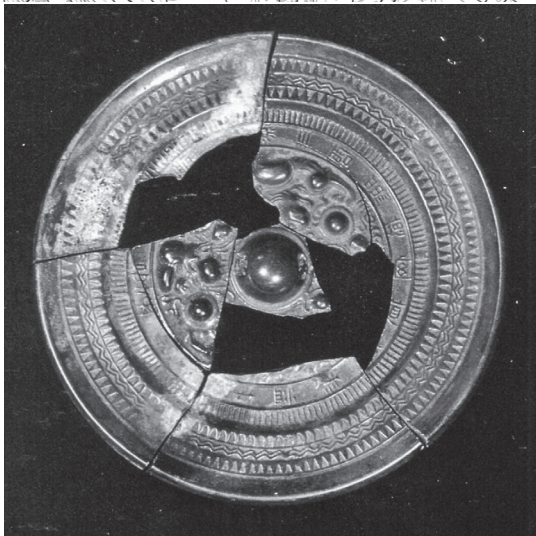
2019年（令和元）、小林健二は中道古墳群を中心に甲斐の墳墓の変遷図を提示した。その中で中道地区の古墳群については小平沢古墳を古墳Ⅲ期古段階（3世紀第4四半期）以前に置き、古墳Ⅳ期にかけて天神山古墳、大丸山古墳、銚子塚古墳と続き、古墳Ⅴ期に丸山塚古墳を置く時代的位置づけを想定した。

小平沢古墳に関する情報を整理しておく。

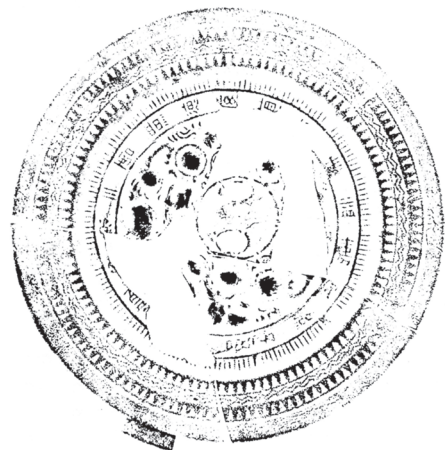


0 (1:25000) 2km

第1図 中道古墳群 (宮澤 1994 より作成)



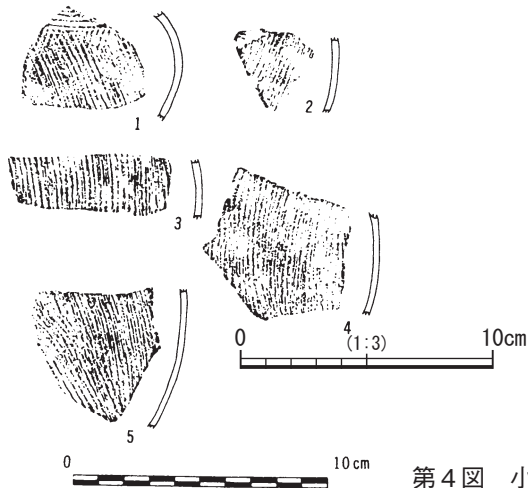
第2図 小平沢古墳出土二神二獸鏡 (山梨県考古学協会 1984)



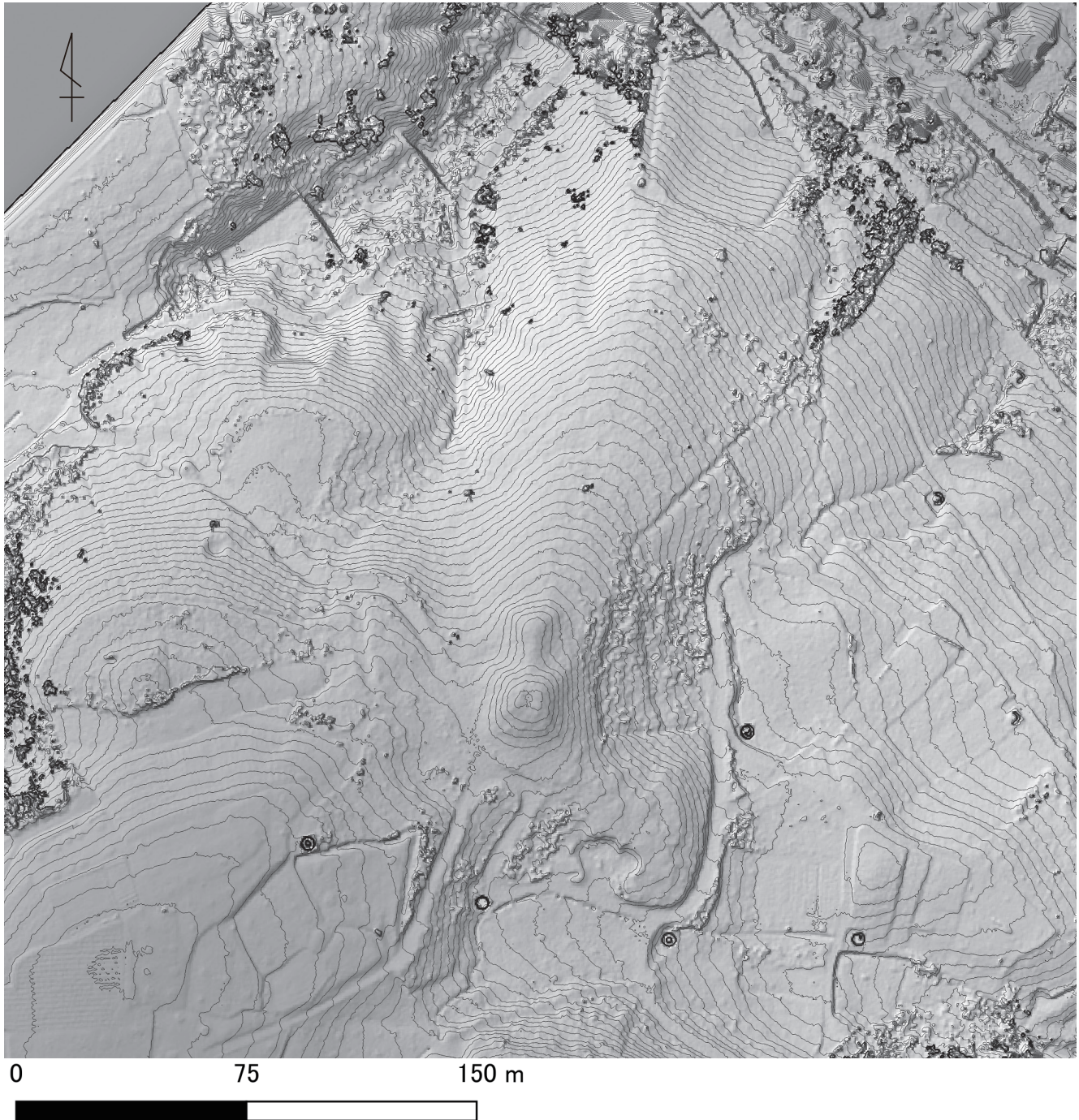
第1図 小平沢古墳出土神獸鏡

0 (1:2) 10cm

第3図 二神二獸鏡 実測図 (山本 1980)



第4図 小平沢古墳出土S字甕 (山本 1980)



第5図 地形解析図

墳形 前方後方墳（文化財指定無）
所在地 甲府市下向山町 3882-1
墳丘規模 全長約 45 m、後方部高さ7.5 m、前方部高さ4 m
主体部 粘土槨もしくは木棺直葬を想定
出土遺物 斜縁二神二獸鏡（「吾作明鏡幽凍三商統徳序道曾年益寿子孫」銘）、S字甕B類（他に勾玉、埴が出土したとされるが不明）

築造時期 3世紀後半以降
調査経緯 1947年 農道敷設の際、鏡、勾玉、土師器を発見、1952年 山梨大学による試掘調査、1978年 実測調査により前方後方墳と判明、1981年 甲斐史学会による試掘調査、2015年 地形測量調査、2023年 帝京大学文化財研究所による微地形解析
従来、小平沢古墳は甲府盆地唯一の前方後方墳と

して評価されてきた。しかし2023年、米倉山の南隣の丘陵上にあたる中央市宇山平において、圃場整備に伴う発掘調査で前方後方墳の双子塚古墳が新たに発見された。主体部構造は不明ながら、墳丘は全長約45mで周壕が全周し、周壕内出土の土器から4世紀後半代の築造と推定され、小平沢古墳に続く前方後方墳の系譜をもつ墳墓の存在が明らかになった。また笛吹市御坂町成田地内にある亀甲塚古墳では、帝京大学の考古学実習として2017年より墳形確認のための試掘調査が行なわれており、現段階では未確定ながら、小平沢古墳とほぼ同時期の前方後方墳ではないかと推定されつつある（櫛原 2020）。このように出現期古墳である前方後方墳は、3世紀後半以降に甲府盆地の複数箇所が発生した可能性があること、盆地内の各地に畿内王権と関係をもつ勢力圏が併存した可能性があることなどが指摘でき、甲府盆地内の古墳時代前期の地域圏のあり方や、古代甲斐国としての統合過程に関する見直しが迫られている。

IV. 調査方法と実施

2023年2月21日、佐藤剛、尾崎昂嗣、中山誠二、植月学、櫛原功一、望月秀和は甲府市教育委員会の立ち会いのもとUAVの飛行、撮影を実施した。

この調査では、レーザー光を照射して、その反射光の情報を元に対象物までの距離やその形状などを計測するLiDAR (Light Detection And Ranging) モジュールを備えたカメラを無人航空機UAV (Unmanned Aerial Vehicle) に搭載し、空域から撮影することで小平沢古墳の形状把握を試みた。得られた3D点群データを用いて、Arc GIS Pro、DTM (Digital Terrain Model) を作成した。そのDTMデータから図に示す標高段彩図などを作成し、文化財研究所内でその形状を判読した。

使用した機材はDJI社製で、UAV、カメラなど本調査で使用した機材の概要、機器、製品名は以下の通りである。

UAV Matrice 300 RTK
 DRTK 2 モバイルステーション
 CSMLレーダー
 LIDER ZENMUSE L1
 地形表現図作成に用いたソフトの名称
 LIDER点群の処理 ArcGIS Pro

マップの作成 QGIS

DTMのサイズ 0.5mメッシュ

V. 小平沢古墳に関する考古学的成果

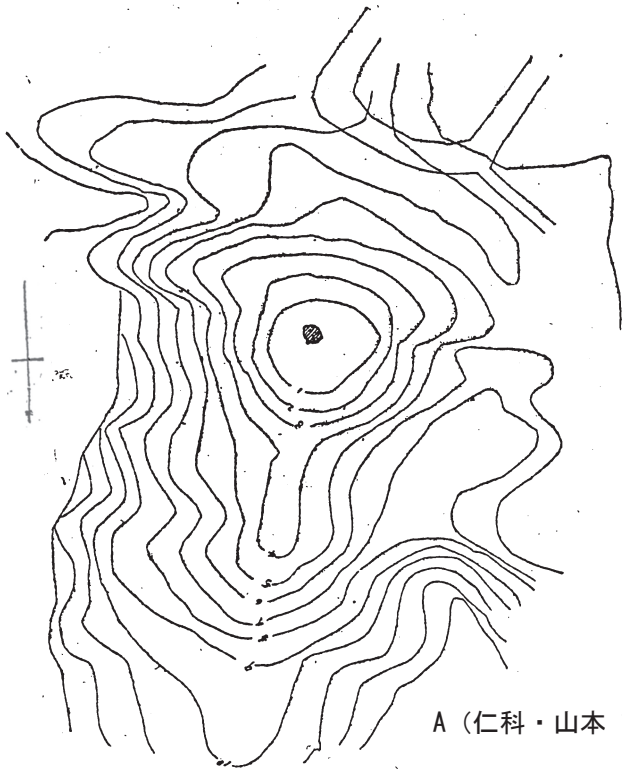
小平沢古墳は米倉山東端の南北尾根上に立地する。これは東側の山麓に想定される集落や甲府盆地の展望、中道往還からの視認性を意識するとともに、曾根丘陵のなかでも高所の立地を選択している。また上の平周溝墓群のある東山地区とは別の隣接丘陵に立地し、上の正方形周溝墓群を東側に遠望する景観である点は古墳の所在地に実際に立ち、周囲を見渡して感じることである。また弥生後期以来の伝統的な墓域を避けた観がある点は先学の指摘するところである。

今回、UAV撮影を実施し、古墳が立地する広範囲の地形全体に関し、樹木を避けて地形に関する点群データのみを得、解析によって詳細な微地形図を作成した。この方法では、基準点を1か所設置し、衛星情報をもとにドローンを飛行させることで、短時間で広範囲のデータを取得することができる。したがって植生に関係なく、短時間で撮影が可能な点は最大の利点である。さらにデータ解析では広範囲の地形図とともに詳細な微地形図の作成が可能となる。それによって古墳を対象とした場合、自然地形と人工的な盛り土の識別、墳丘規模の詳細な計測ができる。これは従来の平板測量、トータルステーション、航空写真による観察では得難い微地形情報の調査方法であり、地形と結びついた遺跡の地形についての情報取得においては、きわめて有効な調査手法といえる。

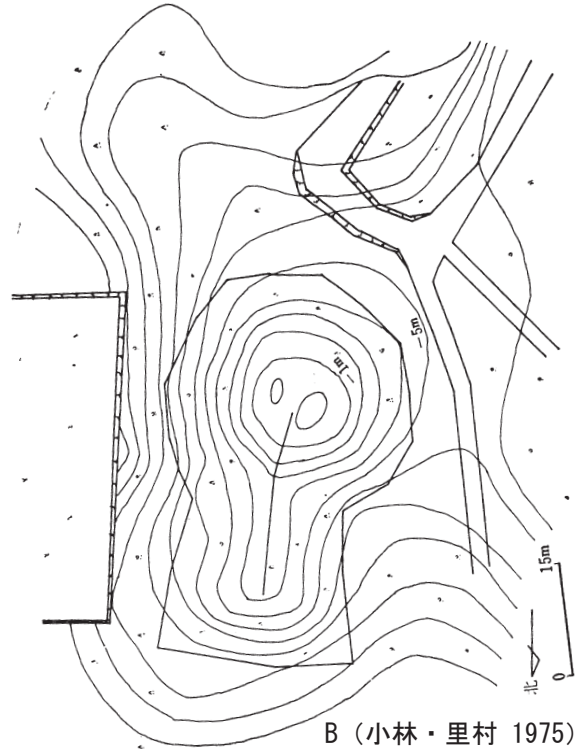
今回のUAV撮影・解析法によって得られた小平沢古墳と周辺に関する情報として、以下の点をあげる。

(1) 小平沢古墳の墳形と規模

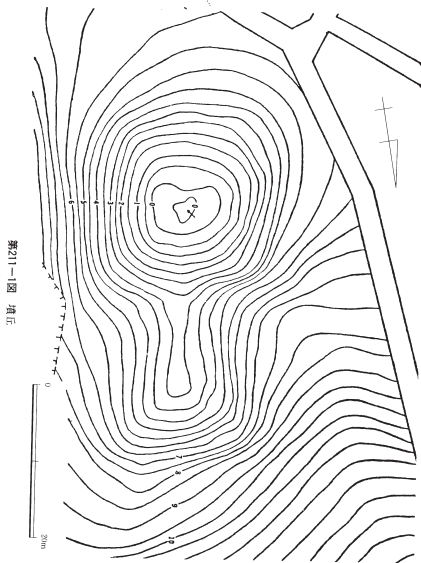
解析データによれば、古墳は主軸長53mの前方後方墳で、前方部は21m、幅22~27mで撥形を呈し、後方は東西37m、南北32mである。前方部と後方部の接続部分は土橋状に細く括れている。従来、公表されてきた平板測量図(図A~C)では、等高線幅が1mと粗く、墳丘規模や墳形を平面図から読み取ることが難しい。またトータルステーションによる平面図(図D)では、等高線幅は20cmとより細かく入れられ、微地形の判読が可能ではあるが、対象地域は古墳とその周囲に限定的で、広範囲を細密に



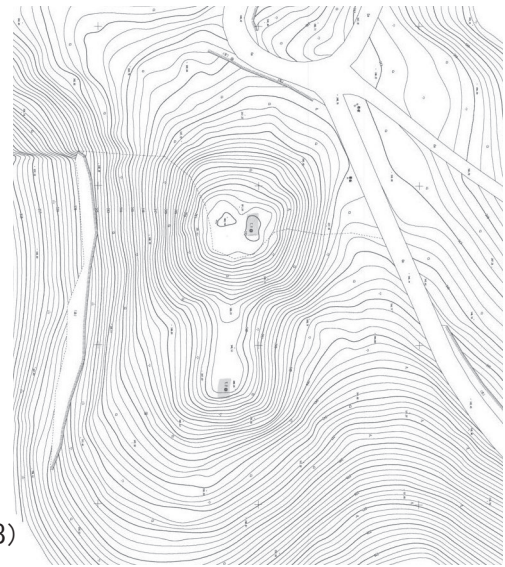
A (仁科・山本 1953)



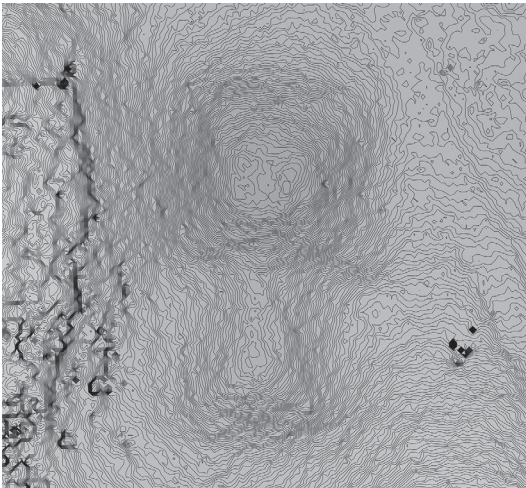
B (小林・里村 1975)



C (小林・里村 1978)

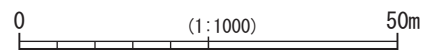


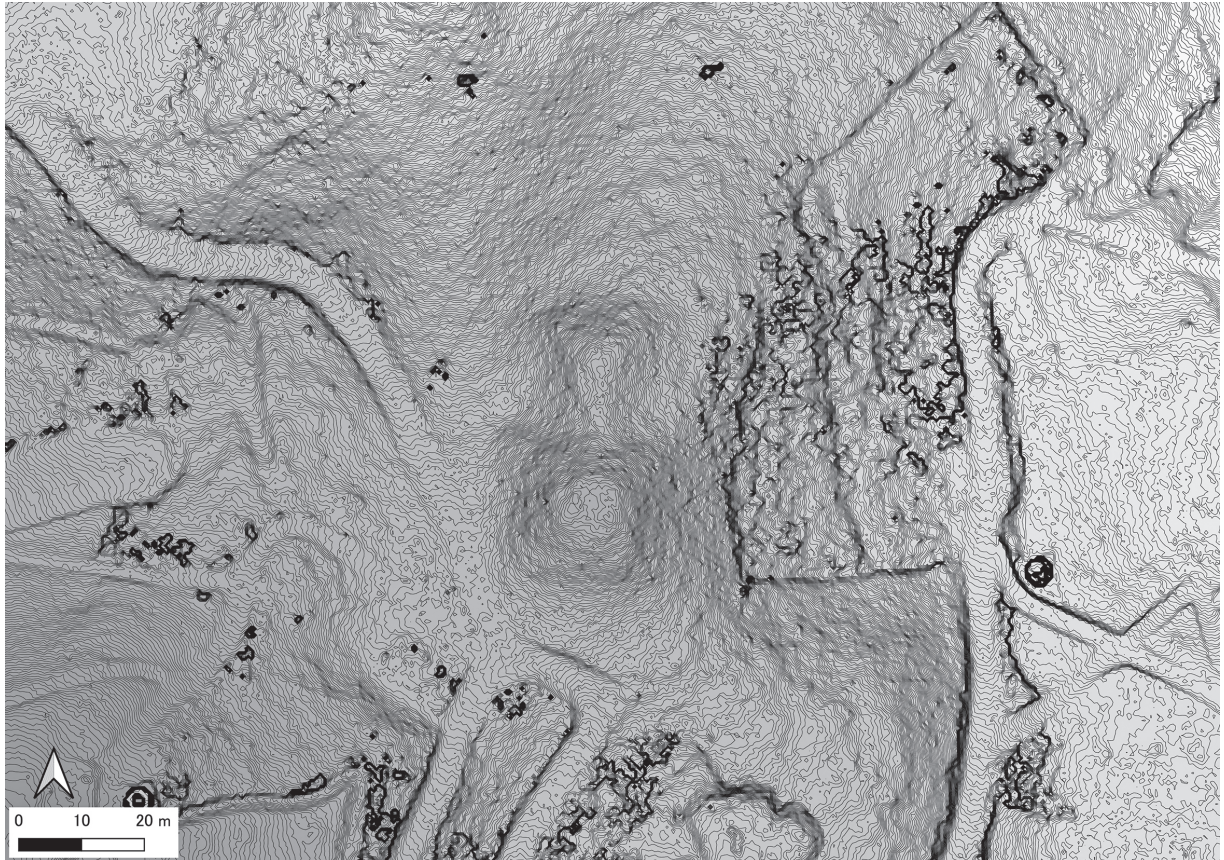
D (甲府市 2015)



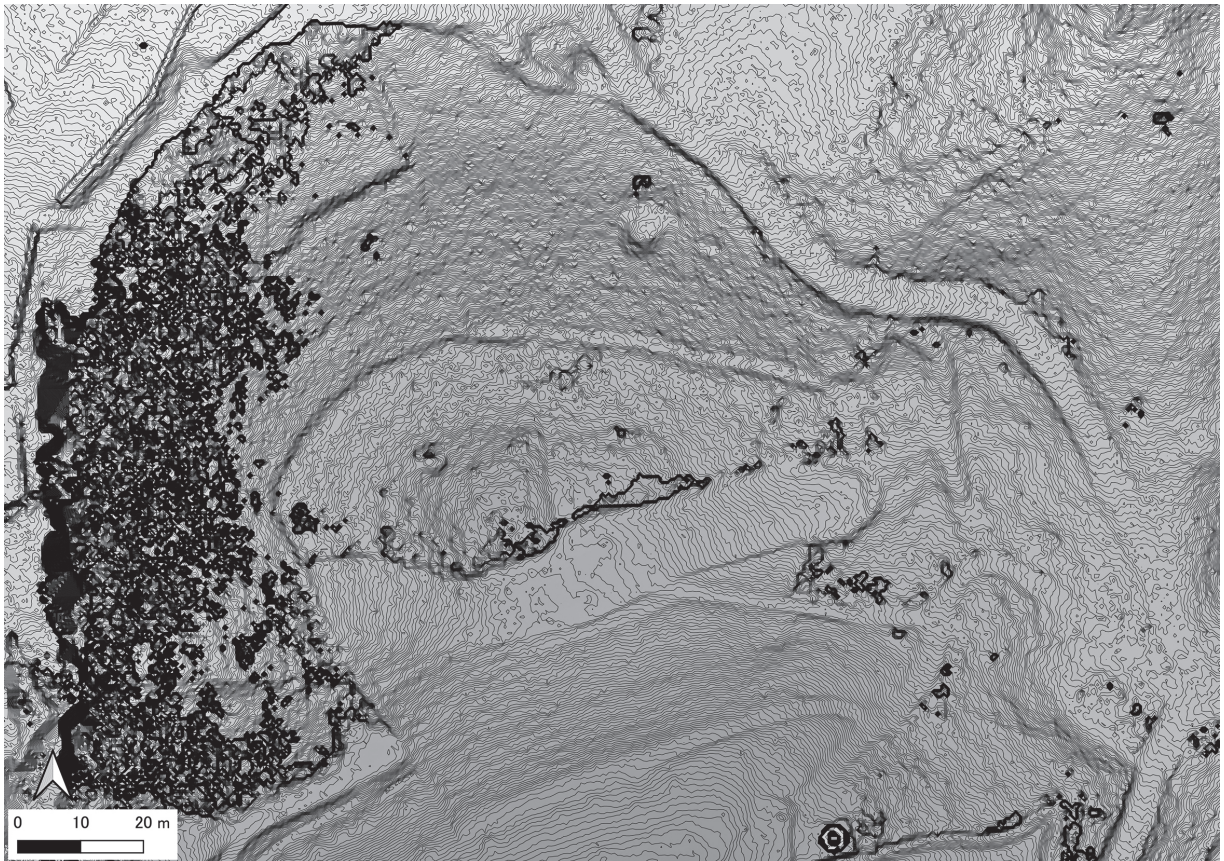
D (2023)

第6図 小平沢古墳 地形測量図および解析図





第7図 小平沢古墳とその周辺



第8図 無名墳および周辺図

0 (1:1200) 50m

捉えることはできていない。また、前方部と後方部の接続部分の括れをこの図から判読できないほか、人工的な盛り土地形と自然地形との区別が難しい点は、粗い等高線図と同様である。しかし、今回作図した3D点群データの解析によれば、その区別は可能である。

（2）古墳の立地と周辺の削土（第7図）

従来の墳形平面図のみではわからないことであるが、広範囲を対象とした今回の解析により、地形と古墳の設定との関係性を見出すことができる。

小平沢古墳の主軸は後方部を北に配置した南北方向であるが、意図的に南北方向を意識したのではなく、自然地形としての尾根地形を利用した結果、南北方向に設置されたことが理解される。すなわち北東へ続く鞍部に対し、前方後方形の低い側である前方部を地形的に低い谷側に向け、高い後方部を高い山側に向けたもので、結果的に南北方向の主軸線となったといえる。また墳丘周囲に周壕の跡がほとんど見出されないのは、傾斜が強い山間地の立地であることによる。こうした自然地形の利用の仕方は、中道古墳群の中で天神山古墳のあり方に類似する。天神山古墳は墳長132mと格段に大形化した前方後円墳で、主軸方向は南西向きではあるが、丘陵縁辺の尾根谷側に前方部、山側に後円部を配置する。滝戸川以西の米倉山周辺に立地する点で小平沢古墳と同じ系譜を想定することが可能で、小平沢古墳から天神山古墳へと連続的な系譜性が指摘されるとともに、両者とも南北方向を主軸とする点は共通する。それに対して滝戸川以東の東山古墳群では、大丸山古墳が丘陵縁辺での東西方向の立地とし、続く銚子塚古墳は丘陵下の低地面に移動し、大きく立地を変更するが、主軸方向は東西方向を継承している。

小平沢古墳の周辺削土については、墳丘西側の農道と墳丘の間から後方部の南側にかけて、やや不明瞭ではあるが人工的な掘削が想定される。南西側から北東に伸びる尾根を分断するように削土したと考えられるが、この周辺ではとくに古墳の南東側傾斜面で地滑りが発生しやすい地形、地質であることから、後方部南西の段差については大幅な掘削ではなく、もともと段差のある自然地形であったとみることもできる。それに対し、前方部北側から東側斜面では周壕、削土の痕跡がまったく認められず、とくに東斜面は地滑り地形のため自然傾斜面が崩壊していることもあり、地形の判読が難しいが、広範囲の

測量によってこうした議論が可能となる。

本墳は、自然の尾根地形を利用しつつ墳丘には相当の盛り土を行い、特に後方部から前方部側を眺めたとき、高低差を著しく感じることができる。その盛り土確保のため、西～南側を削ったものであろうが、平地の立地と違い、山地に立地する古墳のためか、明瞭な周壕を形成していない。

（3）古墳周辺の山道などの痕跡

広範囲の詳細な地形測量により、畑や農道、水路を含め、過去から現在までの様々な土地利用痕を見出すことができる。とくに山麓から古墳に至る北側尾根には、直線的に非常に弱い窪地地形が存在し、前方部に至る道状の痕跡ではないかと推定される。今日に至るまでのさまざまな山地利用の形跡を示すものではあるが、その中には古墳構築に関連した痕跡も想定できる。こうした痕跡の確認は、現地での踏査や既存地形図では困難で、未踏査の区域であっても、解析データからさまざまな痕跡を見出すことができるのは、この調査方法のすぐれた利点のひとつであり、今後の古墳研究に新たな視点を提供するであろう。

（4）無名墳について（第8図）

本墳の西100mのところ谷地形をはさんで北側にせり出した丸い尾根地形がある。東西方向の農道沿いに幅15mの堀切状の窪んだ畑地があり、その北側に、畑地に沿うように東西向きの古墳がある。現状では笹で覆われた林の中に位置し、肉眼で墳形全体を見渡すことはできないが、今回の解析により、小平沢古墳同様に古墳の地形を認識することができる。

本古墳に関しては、昭和10年の米倉山古墳群の分布調査で「米倉山第二号墳」として全長46mの前方後円墳と推定され、『中道町史』でもいちじるしく壊された前方後円墳という認識が示されている。しかし昭和53年（1978）、旧中道町で実施された埋蔵文化財包蔵地調査では、本墳は「円墳（半壊）」と記されている。現在、県内研究者でこの古墳を前方後円墳とする認識はなく、考古学的調査が実施されたことはない。

今回の調査成果によれば、これが古墳であれば西側に後円部に向けた前方後円墳とみられ³⁾、全長は約45mを測る。注目すべきは後円部が方形に見えることで、安易な推測は慎まねばならないが、小平沢古墳同様の前方後方墳ではないか、と推定できる。ま

た小平沢古墳と同様に、丘陵下から見上げたときに目立つように台地縁辺に立地し、古墳周辺は平らに造成され、後方は畑に切られるように一部を欠失するが、周囲の帯状に窪んだ地形は周濠とみられる。また北側には小平沢古墳と同じく、尾根斜面を直線的に上るような道の痕跡が存在する。

このように、この解析により新たな古墳の発見や従来の見解に対する再認識、再検討が可能となるが、解析成果の利用方法や遺構の判読方法等についての議論が今後必要となろう。

おわりに

小平沢古墳が立地する米倉山は林と畑地が分布する山間地域であるが、古墳を中心とした広範囲の地形測量を短時間で実施することができ、LiDAR技術を搭載したUAV撮影・解析は、古墳調査をはじめ、山城跡などの山間部での考古学調査、分布や構造確認、遺構図化作業にきわめて有効な調査手法であるといえる。

また従来の調査では古墳の墳丘を中心にした図化が実施されてきたが、周辺地形を広く図化することによって、古墳の立地や選地、主軸方向の決定要因を周辺の地形全体の中で考えることができる。この技術はデータ解析によって必要な地域の地形解析を行なうことにより、人の諸活動に関するさまざまな微地形判読に用いることができる。地形と人の活動痕跡の研究において、とりわけ考古学研究、遺構の調査研究の分野で今後大いに利活用されることが考えられ、今後、古墳に限らず、山城跡、金山遺跡、山岳宗教遺跡、古道調査など山岳考古学への幅広い応用が予想されるものである。

本稿執筆にあたり、宮澤公雄氏（公益財団法人山梨文化財研究所）には文献面でご教示いただいた。また平塚洋一氏には無名墳に関する情報をいただいたほか、現地踏査に同行してもらい、古墳の現状を一緒に確認した。感謝申し上げたい。なお、解析図作成を佐藤、尾崎、望月が行ない、本文はⅣを佐藤・尾崎が記載、その他を櫛原が執筆、編集した。

註

- 1) 小林健二は中道古墳群の課題として天神山古墳でのさらなる発掘調査の進展、小平沢古墳での墳形の築造時期の確定と周辺の調査、大丸山古墳の墳端の確認、墳丘長の確定、埋葬施設の構造解明をあげ、「将来的な発掘調査や整備により詳細が明らかになり、出現期古墳の動向を含めた中道古墳群及び甲府盆地の様相がさらに究明されることを期待したい。」と述べている（小林 2019）。
- 2) 山本（1980）によると、山梨大学学芸学部（小林知生助教授）により、山梨大学工学部学生、地元右左口、金沢、松本地区の住民および中学生の協力を得て、小平沢古墳、ふじ塚墳「大掃除」（清掃発掘か）が行われた。そのさい、墳丘の実測作業とともに大小5本のトレンチ設定による埋葬施設の確認が行われたが、「施設に関する手がかりすら得られずに終わり、ふじ塚墳丘に移行したのであった」。古墳のある周辺は「小平」（コテイラ）、「小平沢」と呼ばれ、古墳は「瓢箪塚」と呼ばれていたようである（山本 1980、小林・里村 1978）。
- 3) 昭和10年の仁科報告には「第三群（米倉山古墳群）」の略図が掲載されているが（中道町 1975）、二号墳は後円部を東向きとした前方後円墳として図示されていて、実際の向きと逆になっている。この点に関しては、図示する際の間違いといえる。

引用参考文献

- 櫛原功一 2020「山梨県笛吹市亀甲塚古墳の研究—2017・2019年度の調査成果—」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集
- 甲府市教育委員会 2015『天神山古墳』甲府市文化財調査報告78
- 小林広和・里村晃一 1978「甲斐小平沢古墳の墳形と編年的位置」『信濃』第30巻2号 信濃史学会
- 小林健二 2019「甲府盆地から見たヤマト（5）—中道古墳群の歴史的意義—」『研究紀要』35 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 坂本美夫 1998「小平沢古墳」『山梨県史 資料編1 原始・古代1』山梨県
- 末木健 1993「古代甲斐国首長権の成立について」『山梨県史研究』山梨県
- 中道町史編纂委員会 1975「古墳の実態」『中道町史』上巻（仁科義男 1935「中道町内古墳分布調査」『史跡名勝天然記念物調査報告』第八輯を転載）
- 中山誠二 1989「甲府盆地における方形低墳墓残存に関する一考察」『甲斐の成立と地方的展開 磯貝正義先生喜寿記念論文集刊行会
- 仁科義男・山本寿々雄 1953「甲斐国曾根丘陵一帯の古墳及び石器時代遺跡の再調査—主として古墳—」『山梨県教育月報』64号
- 萩原三雄 1985「甲斐国の統一」『古代甲斐国の謎』新人物往来社

橋本博文 1984「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地－その歴史と地域性』地方史研究協議会
宮澤公雄 1994「甲斐曾根丘陵における古墳時代前半期の様相－東山・米倉山地域の再検討を通して－」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会
山梨県考古学協会 1984『山梨の遺跡』山梨日日新聞社

山本寿々雄 1962「山梨県東八代郡中道町小平沢古墳出土の二神二獣鏡について」『富士国立公園博物館研究報告』第7号 富士国立公園博物館
山本寿々雄 1980「小平沢古墳（前方後方）と近在の方形周溝墓を考える上に」『甲斐考古』17の1 山梨県考古学会